

# 髓

— 資料編 —

鞠久類



# 目次

ごん狐	3
よだかの星	17
羅生門	31
蛆の効用	45
檸檬	49
山月記	53
高瀬舟	57
歳棚に祭る神	61
走れメロス	65
舞姫	69



ごん  
狐

新見  
南吉



これは、私が小さいときに、村の茂平<sup>もへい</sup>というおじいさんから聞いたお話です。

昔は、私たちの村の近くの中山<sup>なかやま</sup>というところに小さなお城があって、中山さまというお殿様がおられたそうです。

その中山から少し離れた山の中に、「ごん狐<sup>ごんきつね</sup>」という狐がいました。ごんは一人ぼっちの小狐で、しだのいっばい茂った森の中に穴を掘って住んでいました。そして、夜でも昼でも、あたりの村へ出てきて、いたずらばかりしました。畑へ入って芋を掘りちらしたり、菜種<sup>なたね</sup>がらのほしてあるのへ火をつけたり、百姓家<sup>ひやくしやうや</sup>の裏手につるしてある唐辛子<sup>とうがらし</sup>をむしりにとっていたり、いろんなことをしました。

ある秋のことでした。二、三日雨が降り続いたその間、ごんは、外へも出られなくて穴の中にしゃがんでいました。

雨があがると、ごんは、ほっとして穴からはい出ました。空はからっと晴れていて、百舌鳥<sup>もず</sup>の声がきんきん、ひびいていました。

ごんは、村の小川<sup>おがわ</sup>の堤<sup>つみ</sup>まで出て来ました。あたりのすすきの穂には、まだ雨のし

ずくが光っていました。川は、いつもは水が少ないのですが、三日もの雨で水がどっと増していました。ただのときは水につかることのない、川べりのすすきや萩の株が、黄色くにこった水に横倒しになって、もまれていきます。ごんは川下の方へと、ぬかるみ道を歩いていきました。

ふと見ると、川の中に人がいて、何かやっています。ごんは、見つからないように、そうっと草の深いところへ歩きよって、そこからじっとのぞいてみました。

「兵十だ」と、ごんは思いました。兵十はぼろぼろの黒いきものをまくし上げて、腰のところまで水にひたりながら、魚をとるはりきりという網をゆすぶっていました。はちまきをした顔の横っちょように、まるい萩の葉が一枚、大きな黒子みにいへばりついていました。

しばらくすると、兵十は、はりきり、網の一番後ろの袋のようになったところを、水の中から持ち上げました。その中には、芝の根や、草の葉や、くさった木ぎれなどが、ごちゃごちゃ入っていましたが、でもところどころ、白いものがきらきら光っています。それは、太いうなぎの腹や大きなきすの腹でした。兵十は、びくの中へ、そのうなぎやきすを、ごみと一緒にぶちこみました。そして、また袋の口をしぼって、水の中へ入れました。



兵十はそれから、びくをもって川から上がり、びくを土手<sup>どて</sup>において、何を探しにか、川上<sup>かわかみ</sup>の方へかけていきました。

兵十がいなくなると、ごんは、ぴよいと草の中からとび出して、びくのそばへかけつけました。ちよいといたずらがしたくなったのです。ごんはびくの中の魚をつかみ出しては、はりきり網のかかっているところより下手<sup>しもて</sup>の川の中を目がけて、ぼんぼん投げ込みました。どの魚も「とぼん」と音を立てながら、にこった水の中へもぐりこみました。

一番しまいに、太いうなぎをつかみにかかりましたが、何しろ、ぬるぬるとすべり抜けるので、手ではつかめません。ごんはじれったくなって、頭をびくの中につっこんで、うなぎの頭を口にくわえました。うなぎは、キュツと言ってごんの首へ巻きつきました。そのとたんに兵十が、向こうから「うわアぬすと狐め」と怒鳴りたてました。ごんは、びっくりして飛び上がりました。うなぎを振り捨てて逃げようとしたが、うなぎは、ごんの首に巻きついたまま離れません。ごんはそのまま横つとびに飛び出して一生懸命に逃げていきました。

ほら穴の近くの、はんの木の下で振り返って見ましたが、兵十は追っかけては来ませんでした。

ごんは、ほっとして、うなぎの頭をかみくだき、やっとはずして、穴の外の草の葉の上にのせておきました。

## 二

十日ほど経って、ごんが弥助やすけというお百姓の家の裏を通りかかりますと、そのいちじくの木のかげで、弥助の家内かないがおはぐろをつけていました。鍛冶屋かじやの新兵衛しんべえの家の裏を通ると、新兵衛の家内が髪をすいていました。ごんは、「ふふん、村に何かあるんだな」と、思いました。

「何なんだろう、秋祭かな。祭なら、太鼓や笛の音がしそうなものだ。それに第一、お宮にのぼりが立つはずだが」

こんなことを考えながらやって来ますと、いつの間にか、表に赤い井戸のある、兵十の家の前へ来ました。その小さな、壊れかけた家の中には、大勢おおぜいの人が集まっています。よそいきの着物を着て、腰に手拭てぬぐいをさげたりした女たちが、表のかまどで火をたいています。大きな鍋なべの中では、何かぐずぐず煮えています。

「ああ、葬式だ」と、ごんは思いました。

「兵十の家のだれが死んだんだろう」

お午がすぎると、ごんは、村の墓地へ行って、六地藏ろくじざうさんのかげに隠れていました。いいお天気で、遠く向こうには、お城の屋根瓦やねがわらが光っています。墓地には、彼岸花ひがなばなが、赤い布きれのように咲きつづいていました。と、村の方から、カーン、カーン、と、鐘かねが鳴って来ました。葬式まうしの出る合図あいずです。

やがて、白い着物を着た葬列のものたちがやって来るのがちらちら見えはじめました。話し声も近くなりました。葬列は墓地へ入って来ました。人々を通ったあとには、彼岸花が、踏み折られていました。

ごんは伸びあがって見ました。兵十が、白いかみしもをつけて、位牌いはいをささげています。いつもは、赤いさつま芋いもみたいな元氣のいい顔が、今日は何だかしおれていました。

「ははん、死んだのは兵十のおつ母かあだ」

ごんはそう思いながら、頭をひっこめました。

その晩、ごんは、穴の中で考えました。

「兵十のおつ母は、床とこについていて、うなぎが食べたいと言ったにちがいない。それで兵十がはりきり網を持ち出したんだ。ところが、わしがいたずらをして、う

なぎをとって来てしまった。だから兵十は、おっ母にうなぎを食べさせることができなかった。そのままおっ母は、死んじやったにちがいない。ああ、うなぎが食べたい、うなぎが食べたいと思ひながら、死んだんだろう。ちょッ、あんないたずらをしなけりゃよかった」

## 三二

兵十が、赤い井戸のところで、麦をといでいました。

兵十は今まで、おっ母と二人ふたりきりで、貧しいくらしをしていたもので、おっ母が死んでしまつては、もう一人ぼっちでした。

「おれと同じ一人ぼっちの兵十か」

こちらの物置ものおきの後ろから見ていたごんは、そう思いました。

ごんは物置のそばをはなれて、向こうへ行きかけますと、どこかで、いわしを売る声がします。

「いわしの安売りだアイ。活きのいいいわしだアイ」

ごんは、その威勢のいい声のする方へ走っていきました。と、弥助やすけのおかみさん

が、裏戸口から「いわしをおくれ」と言いました。いわしうり売は、いわしのかごをつんだ車を、道ばたにおいて、ぴかぴか光るいわしを両手でつかんで、弥助の家の中へもってはいりました。ごんはそのすきまに、かごの中から五、六匹のいわしをつかみ出して、もと来た方へかけだしました。そして、兵十の家の裏口から、家の中へいわしを投げこんで、穴へ向かってかけもどりました。途中の坂の上で振り返って見ますと、兵十がまだ、井戸のところまで麦をといでいるのが小さく見えました。

ごんは、うなぎのつぐないに、まず一つ良いことをしたと思いました。

次の日には、ごんは山で栗くりをどっさり拾って、それをかかえて、兵十の家へ行きました。裏口からのぞいて見ますと、兵十は、午飯ひるめしを食べかけて、茶碗ちやわんを持ったまま、ぼんやりと考え込んでいました。変なことには、兵十のほっぺたにかすり傷がついています。「どうしたんだろう」とごんが思っていますと、兵十がひとりごとをいいました。

「いったいだれが、いわしなんかをおれの家へ放り込んでいったんだろう。おかげでおれは、盗人ぬすびとと思われて、いわし屋のやつに、ひどい目にあわされた」と、ぶつぶつ言っています。

ごんは、これはしまったと思いました。かわいそうに兵十は、いわし屋にぶんな

ぐられて、あんな傷までつけられたのか。

ごんはこう思いながら、そっと物置の方へまわってその入口に、栗をおいて帰りました。

次の日も、その次の日もごんは、栗を拾っては、兵十の家へ持ってきてやりました。その次の日には、栗ばかりでなく、まつたけも二、三本持っていました。

## 四

月のいい晩でした。ごんは、ぶらぶら遊びに出かけました。中山さまのお城の下を通って少し行くと、細い道の向こうからだれか来るようです。話し声が聞こえます。チンチロリン、チンチロリンと松虫が鳴いています。

ごんは、道の片側に隠れて、じっとしていました。話し声はだんだん近くなりました。それは、兵十と加助かすけというお百姓でした。

「そうそう、なあ加助」と、兵十が言いました。

「ああん？」

「おれあ、このごろ、とても不思議なことがあるんだ」

「何が？」

「おっ母が死んでからは、だれだか知らんが、おれに粟やまつたけなんかを、毎日  
毎曰くれるんだよ」

「ふうん、だれが？」

「それがわからんのだよ。おれの知らんうちに、おいていくんだ」

「ごんは、二人のあとをつけていきました。」

「ほんとかい？」

「ほんとだとも。うそと思うなら、あした見に来いよ。その粟を見せてやるよ」

「へえ、変なこともあるもんだなア」

それなり、二人はだまって歩いていきました。

加助がひよいと、後ろを見ました。ごんはびくつとして、小さくなって立ち止  
まりました。加助は、ごんには気がつかないで、そのままさっさと歩きました。

吉兵衛きちべえというお百姓の家まで来ると、二人はそこへ入っていきました。ポン・ポン・ポ  
ン・ポンと木魚もくぎょの音がしています。窓の障子しょうじにあかりがさして、大きな坊主頭ぼんずあたまが  
うつって動いていました。ごんは「お念仏があるんだな」と思いながら井戸のそば  
にしゃがんでいました。しばらくすると、また三人ほど、人がつれだつて吉兵衛の

家へ入っていきました。お経を読む声が聞こえて来ました。

## 五

ごんは、お念仏がすむまで、井戸のそばにしゃがんでいました。兵十と加助は、また一緒に帰っていきます。ごんは、二人の話を聞こうと思って、ついていきました。兵十の影法師かげぼうしをふみふみきました。

お城の前まで来たとき、加助が言い出しました。

「さっきの話は、きつと、そりゃあ、神さまのしわざだぞ」

「えっ？」と、兵十はびっくりして、加助の顔を見ました。

「おれは、あれからずっと考えていたが、どうもそりゃ人間じゃない。神さまだ。

神さまが、お前がたった一人になったのをあわれに思わっしゃって、いろんなものを恵んでくださるんだよ」

「そうかなあ」

「そうだとも。だから、毎日神さまにお礼を言うがいいよ」

「うん」



ごんは、へえ、こいつはつまらないなと思いました。おれが、栗やまつたけを持って行ってやるのに、そのおれにはお札を言わないで、神さまにお札を言うんじゃないア、おれは、引き合わないなあ。

## 六

そのあくる日も、ごんは栗をもって兵十の家へ出かけました。兵十は物置で縄なわをなっていました。それでごんは家の裏口から、こっそり中へ入りました。

そのとき兵十は、ふと顔をあげました。と、狐が家の中へはいったではありませんか。こないだうなぎを盗みやがったあのごん狐めが、またいたずらをしに来たな。

「ようし」

兵十は立ちあがって、納屋なやにかけてある火縄銃ひなわじゆうをとって、火薬をつめました。

そして足音をしのばせて近寄って、いま戸口を出ようとするごんを、ドンと、うちました。ごんは、ばたりと倒れました。兵十はかけよって来ました。家の中を見ると、土間どまに栗が、かためておいてあるのが目につきました。

「おや」と兵十は、びっくりしてごんに目を落としました。

「ごん、お前まいだったのか。いつも栗栗をくれたのは」

ごんは、ぐったりと目をつぶったまま、うなずきました。

兵十は火縄銃をばたりと、とり落としました。青い煙が、まだ筒口つつぐちから細く出ていました。

よ  
だ  
か  
の  
星

宮  
沢  
賢  
治



よだかは、実にみにくい鳥です。

顔は、ところどころ味噌みそをつけたようにまだらで、くちばしは、ひらたくて耳までさけています。

足は、まるでよばよばで、一間いっけんとも歩けません。

ほかの鳥は、もう、よだかの顔を見ただけでも、いやになってしまうという工合ぐあいでした。

たとえば、ひばりも、あまり美しい鳥ではありませんが、よだかよりは、ずっと上だと思っていましたので、夕方など、よだかにあうと、さもさみいやそうに、しんねりと目をつぶりながら、首をそっぽへ向けるのでした。もっと小さなおしゃべりの鳥などは、いつでもよだかのまっこうから悪口あくこうをしました。

「ヘン。また出て来たね。まあ、あのさまをごらん。ほんとうに、鳥の仲間のつらよごしだよ」

「ね、まあ、あの口の大きいことさ。きつと、かえるの親類か何かなんだよ」

こんな調子です。おお、よだかでないただのたかならば、こんな生なまはんかのちいさい鳥は、もう名前を聞いただけでも、ぶるぶるふるえて、顔色を変えて、からだをちぢめて、木の葉のかげにでも隠れたでしょう。ところが夜だかは、ほんとうは

鷹<sup>たか</sup>の兄弟でも親類でもありませんでした。かえって、よだかは、あの美しいかわせみや、鳥の中の宝石のような蜂<sup>はち</sup>すずめの兄さんでした。蜂すずめは花の蜜<sup>みつ</sup>をたべ、かわせみはお魚を食べ、夜だかは羽虫をとってたべるのでした。それによだかには、するどい爪<sup>つめ</sup>もするどいくちばしもありませんでしたから、どんなに弱い鳥でも、よだかをこわがる筈<sup>はず</sup>はなかったのです。

それなら、たかという名のついたことは不思議なようですが、これは、一つはよだかのはねが無暗<sup>むやみ</sup>に強くて、風を切って翔<sup>か</sup>けるときなどは、まるで鷹のように見たことと、も一つはなきごえがするどくて、やはりどこか鷹に似ていた<sup>ため</sup>です。もちろん、鷹は、これをひじょうに気にかけて、いやがっていました。それですから、よだかの顔さえ見ると、肩<sup>かた</sup>をいからせて、早く名前をあらためろ、名前をあらためろ、と言うのでした。

ある夕方、とうとう、鷹がよだかのうちへやって参りました。

「おい。居るかい。まだお前は名前をかえないのか。ずいぶんお前も恥<sup>はじ</sup>知らずだな。お前とおれでは、よつぼど人格がちがうんだよ。たとえばおれは、青いそらをどこまでも飛んで行く。おまえは、曇<sup>くも</sup>って薄暗い日か、夜でなくちゃ、出て来ない。それから、おれのくちばしやつめを見る。そして、よくお前のとくらべて見

るがいい」

「鷹さん。それはあんまり無理です。私の名前は私が勝手につけたものではありません。神さまから下さったのです。」

「いいや。おれの名なら、神さまから貰ったのだといつてもよからうが、お前のは、いわば、おれと夜と、両方から借りてあるんだ。さあ返せ」

「鷹さん。それは無理です」

「無理じゃない。おれがいい名を教えてやろう。市蔵いちぞうというんだ。市蔵とな。いい名だろう。そこで、名前を変えるには、改名の披露ひろうというものをしないといけない。いいか。それはな、首へ市蔵と書いたふだをぶらさげて、私は以来市蔵と申しますと、口上くわじょうをいって、みんなの所をおじぎしてまわるのだ」

「そんなことはとても出来ません」

「いいや。出来る。そうしろ。もしあさつての朝までに、お前がそうしなかったら、もうすぐ、つかみ殺すぞ。つかみ殺してしまうから、そう思え。おれはあさつての朝早く、鳥のうちを一軒けんずつまわって、お前が来たかどうかを聞いてあるく。一軒でも来なかったという家があったら、もう貴様もその時がおしまいだぞ」

「だってそれはあんまり無理じゃありませんか。そんなことをする位なら、私はも

う死んだ方がましです。今すぐ殺してください」

「まあ、よく、あとで考えてごらん。市藏なんてそんなにわるい名じゃないよ」

鷹は大きなねを一杯にひろげて、自分の巢の方へ飛んで帰って行きました。

よだかは、じっと目をつぶって考えました。

（一たい僕は、なぜこうみんなにいやがられるのだろう。僕の顔は、味噌をつけたようで、口は裂けてるからなあ。それだって、僕は今まで、なんにも悪いことをしたことがない。赤ん坊のめじろが巢から落ちていたときは、助けて巢へ連れて行ってやった。そしてためじろは、赤ん坊をまるでぬす人からでも取り返すように僕から引き離れたんだなあ。それからひどく僕を笑った。それにああ、今度は市藏だなんて、首へふだをかけるなんて、つらい話だなあ）

あたりは、もう薄暗くなっていました。夜だかは巢から飛び出しました。雲が意地悪く光って、低くたれています。夜だかはまるで雲とすれすれになって、音なく空を飛びまわりました。

それからにわかによだかは口を大きくひらいて、はねをまっすぐに張って、まるで矢のようにそらを横切りました。小さな羽虫が幾匹も幾匹もその咽喉に入りま

した。



からだがつちにつくつかないうちに、よだかはひらりとまたそらへはねあがりました。もう雲は鼠色ねずみいろになり、向こうの山には山焼けの火がまっ赤です。

夜だかと思い切って飛ぶときは、そらがまるで二つに切れたように思われます。一ぴきの甲虫かぶとむしが、夜だかの咽喉にはいつて、ひどくもがきました。よだかはすぐそれを呑みこみましたが、その時何だかせなかがぞつとしたように思いました。

雲はもうまっくろく、東の方だけ山やけの火が赤くうつつて、恐ろしいようです。よだかはむねがつかえたように思いながら、またそらへのぼりました。

また一ぴきの甲虫が、夜だかののどに入りました。そしてまるでよだかの咽喉をひつかいてばたばたしました。よだかはそれを無理にのみこんでしまいましたが、その時、急に胸がどきつとして、夜だかは大声をあげて泣き出しました。泣きながらぐるぐるぐる空をめぐったのです。

（ああ、甲虫やたくさんの羽虫が、毎晩僕に殺される。そしてそのただ一つの僕は、こんどは鷹に殺される。それがこんなにつらいのだ。ああ、つらい、つらい。僕はもう虫をたべないで餓えて死のう。いやその前にもう鷹が僕を殺すだろう。いや、その前に、僕は遠くの遠くの空の向こうに行ってしまうおう）

山焼けの火は、だんだん水のように流れてひろがり、雲も赤く燃えているよう

です。

よだかはまっすぐに、弟の川せみの所へ飛んで行きました。きれいな川せみも、丁度起きて遠くの山火事を見ていた所でした。そしてよだかの降りて来たのを見て言いました。

「兄さん。こんばんは。何か急のご用ですか」

「いや、僕は今度遠い所へ行くからね、その前ちょっとお前に遭あいに来たよ」

「兄さん。行っちゃいけませんよ。蜂雀はちすずめもあんな遠くにいるんですし、僕ひとりぼっちになってしまふじゃありませんか」

「それはね。どうも仕方ないのだ。もう今日は何も言わないでくれ。そしてお前もね、どうしてもとらなければならぬときのほかは、いたずらにお魚を取ったりしないようにしてくれ。ね、さよなら」

「兄さん。どうしたんです。まあ、もうちょっとお待ちなさい」

「いや、いつまで居てもおんなじだ。はちすずめへ、あとでよろしく言ってやってくれ。さよなら。もうあわないよ。さよなら」

よだかは泣きながら自分のお家うちへ帰って参りました。みじかい夏の夜はもう明けかかっていました。

羊齒<sup>しだ</sup>の葉は、よあけの霧<sup>きり</sup>を吸って、青くつめたくゆれました。よだかは高くきしきしと鳴きました。そして巣の中をきちんとかたづけ、きれいにからだ中のねや毛をそろえて、また巣から飛び出しました。

霧がはれて、お日さまがちやうど東からのぼりました。夜だかはぐらぐらするほどまぶしいのをこらえて、矢のように、そっちへ飛んで行きました。

「お日さん、お日さん。どうぞ私をあなたの所へ連れてってください。灼<sup>や</sup>けて死んでもかまいません。私のようなみにくいからだでも灼けるとときには小さなひかりを出すでしょう。どうか私を連れてってください」

行っても行っても、お日さまは近くなりませんでした。かえってだんだん小さく遠くなりながらお日さまが言いました。

「お前はよだかだな。なるほど、ずいぶんつらからう。今夜そらを飛んで、星にそなたのんでごらん。お前はひるの鳥ではないのだからな」

夜だかはおじぎを一つしたと思いましたが、急にぐらぐらしてとうとう野原の草の上に落ちてしまいました。そしてまるで夢<sup>ゆめ</sup>を見ているようでした。からだがつうと赤や黄の星のあいだをのぼって行ったり、どこまでも風に飛ばされたり、また鷹が来てからだをつかんだりしたようでした。

つめたいものがにわかに顔に落ちました。よだかは眼をひらきました。一本の若いすすきの葉から露がしたたったのでした。もうすっかり夜になって、空は青ぐろく、一面の星がまたたいっていました。よだかはそらへ飛びあがりました。今夜も山やけの火はまっかです。よだかはその火のかすかな照りと、つめたいほしあかりの中をとびめぐりました。それからもう一ぺん飛びめぐりました。そして思い切って西のそらのあの美しいオリオンの星の方に、まっすぐに飛びながら叫びました。

「お星さん。西の青じろいお星さん。どうか私をあなたのところへ連れてってください。灼けて死んでもかまいません」

オリオンは勇ましい歌をつづけながらよだかなどはてんで相手にしませんでした。よだかは泣きそうになって、よろよろと落ちて、それからやつとふもとまっつて、もう一ぺんとびめぐりました。それから、南の大犬座の方へまっすぐに飛びながら叫びました。

「お星さん。南の青いお星さん。どうか私をあなたの所へつれてってください。やけて死んでもかまいません」

大犬は青や紫や黄やうつくしくせわしくまたきながら言いました。

「馬鹿を言うな。おまえなんか一体どんなものだい。たかが鳥じゃないか。おまえ

のはねでここまで来るには、億年兆年億兆年だ」

そしてまた別の方を向きました。

よだかはがっかりして、よろよろ落ちて、それからまた二へん飛びめぐりました。それからまた思い切って北の大熊星の方へまっすぐに飛びながら叫びました。

「北の青いお星さま、あなたの所へどうか私を連れてってください」

大熊星はしずかに言いました。

「余計なことを考えるものではない。少し頭をひやして来なさい。そういうときは、氷山の浮ういている海の中へ飛び込むか、近くに海がなかったら、氷をうかべたコップの水の中へ飛び込むのが一等だ」

よだかはがっかりして、よろよろ落ちて、それからまた、四へんそらをめぐりました。そしてもう一度、東から今のぼった天あまの川がわの向う岸の鷺わしの星に叫びました。

「東の白いお星さま、どうか私をあなたの所へ連れてってください。やけて死んでもかまいません」

鷺は大風おおふうに言いました。

「いいや、とてもとても、話にも何にもならん。星になるには、それ相應の身分でなくちゃいかん。またよほど金もいるのだ」

よだかはもうすっかり力を落としてしまつて、はねを閉じて、地に落ちて行きました。そしてもう一尺で地面にその弱い足がつくというとき、よだかは俄かにのろしのようにそらへ飛びあがりました。そののなかほどへ来て、よだかはまるで鷲が熊を襲うときするように、ぶるっとからだをゆすつて毛をさかだてました。

それからキシキシキシキシキシッと高く高く叫びました。その声はまるで鷹でした。野原や林にねむっていたほかのとりは、みんな目をさまして、ぶるぶるふるえながら、いぶかしそうにほしぞらを見あげました。

夜だかは、どこまでも、どこまでも、まっすぐに空へのぼって行きました。もう山焼けの火はたばこの吸殻のくらいにしか見えません。よだかはのぼつてのぼつて行きました。

寒さにいきはむねに白く凍りました。空気がうすくなった為に、はねをそれはそれはせわしくうごかさなければなりませんでした。

それなのに、ほしの大きさは、さつきと少しも変わりません。つくいきは、ふいこのようです。寒さや霜がまるで剣のようによだかを刺しました。よだかははねがすっかりしびれてしまいました。そしてなみだぐんだ目をあげてもう一ぺんそらを見ました。そうです。これがよだかの最後でした。もうよだかは落ちているのか、

のぼっているのか、さかさになっているのか、上を向いているのかも、わかりませんでした。ただころもちは安らかに、その血のついた大きなくちばしは、横にまがってはいいましたが、たしかに少しわらっておりまして。

それからしばらく経ってよだかはつきりまなこをひらきました。そして自分のからだがいま燐りんの火のような青い美しい光になって、しずかに燃えているのを見ました。

すぐとなりは、カシオペア座でした。天の川の青じろいひかりが、すぐうしろになっていました。

そしてよだかの星は燃えつづけました。いつまでもいつまでも燃えつづけました。





# 羅生門

芥川  
龍之介



ある日の暮方くれがたの事である。一人の下人げにんが、羅生門らしやうもんの下で雨やみを待っていた。

広い門の下には、この男のほかに誰もいない。ただ、所々丹塗にぬりの剥はげた、大きな円柱まるばしらに、きりぎりすが一匹とまっている。羅生門が、朱雀大路すざくおおじにある以上は、この男のほかに、雨やみをする市女笠いちめがさや揉烏帽子もみえぼしが、もう二、三人はありそうなものである。それが、この男のほかに誰もいない。

何故かという、この二、三年、京都には、地震とか辻風つじかぜとか火事とか飢饉ききんとかいう災わざわいがつづいて起こった。そこで洛中らくちゆうのさびれ方は一通りではない。旧記によると、仏像や仏具を打碎たたきいて、その丹にがついたり、金銀の箔はくがついたりした木を、路ばたにつみ重ねて、薪たきぎの料しろに売っていたという事である。洛中がその始末であるから、羅生門の修理などは、元より誰も捨てて顧かえりみる者がなかった。するとその荒れ果てたのをよい事にして、狐狸こりが棲すむ。盗人ぬすびとが棲すむ。とうとうしまいには、引き取り手のない死人を、この門へ持つて来て、棄すてて行くという習慣さえ出来た。そこで、日の目が見えなくなると、誰でも氣味を悪がって、この門の近所へは足ぶみをしない事になってしまったのである。

その代わり、また鴉からすがどこからか、たくさん集まって来た。昼間見ると、その鴉が何羽となく輪を描いて、高い鴟尾しびのまわりを啼なきながら、飛びまわっている。こ

とに門の上の空が、夕焼けであかくなる時には、それが胡麻ごまをまいたようにはつきり見えた。鴉もろうつんは、勿論、門の上にある死人の肉を、啄つばみに来るのである。——もつとも今日は、刻限こくげんが遅いせいとか、一羽も見えない。ただ、所々、崩れかかった、そうしてその崩れ目に長い草のはえた石段の上に、鴉の糞ふんが、点々と白くこびりついているのが見える。下人は七段ある石段の一番上の段に、洗いざらした紺あおの襦すを据えて、右の頬に出来た、大きな面皰にきびを気にしながら、ぼんやり、雨のふるのを眺めていた。

作者はさつき、「下人が雨やみを待っていた」と書いた。しかし、下人は雨がやんでも、格別どうしようという当てはない。ふだんなら、勿論、主人の家へ帰るべきはずである。ところがその主人からは、四、五日前に暇いとまを出された。前にも書いたように、当時京都の町は一通りならず衰微すいびしていた。今この下人が、永年、使われていた主人から、暇を出されたのも、実はこの衰微の小さな余波にほかならない。だから「下人が雨やみを待っていた」というよりも「雨にふりこめられた下人が、行き所がなくて、途方にくれていた」という方が、適當である。そのうえ、今日の空模様も少なからず、この平安朝の下人の *Sentimentalisme* センチメンタリズム に影響した。申まをの刻下くがりからふり出した雨は、いまだに上がるけしきがない。そこで、下人は、何

をおいても差し当たり明日の暮らしをどうにかしようとして——いわばどうにもならない事を、どうにかしようとして、とりとめもない考えをたどりながら、さつきから朱雀大路にふる雨の音を、聞くともなく聞いていたのである。

雨は、羅生門をつつんで、遠くから、ざあっという音をあつめて来る。夕闇は次第に空を低くして、見上げると、門の屋根が、斜につき出した甍の先に、重たくうす暗い雲を支えている。

どうにもならない事を、どうにかするためには、手段を選んでゐる違はない。選んでいれば、築土の下か、道ばたの土の上で、飢死をするばかりである。そうして、この門の上へ持つて来て、犬のように棄てられてしまふばかりである。選ばないとすれば——下人の考えは、何度と同じ道を低徊した揚句に、やっとこの局所へ逢着した。しかしこの「すれば」は、いつまでたつても、結局「すれば」であった。下人は、手段を選ばないという事を肯定しながらも、この「すれば」のかたをつけるために、当然、その後に来るべき「盗人になるよりほかに仕方がない」という事を、積極的に肯定するだけの、勇気が出ずにいたのである。

下人は、大きな嚏をして、それから、大儀そうに立ち上がった。夕冷えのする京都は、もう火桶が欲しいほどの寒さである。風は門の柱と柱との間を、夕闇と共に

遠慮なく、吹きぬける。丹塗にぬりの柱にとまっていたきりぎりすも、もうどこかへ行つてしまつた。

下人は、頸くびをちぢめながら、山吹やまぶきの汗衫かざみに重ねた、紺あおの襖あおの肩を高くして門のまわりを見まわした。雨風の患うれえのない、人目にかかる惧おそれのない、一晚楽にねられそうな所があれば、そこでもかくも、夜を明かそうと思つたからである。すると、幸い門の上の楼へ上がる、幅の広い、これも丹を塗つた梯子はしこが眼についた。上なら、人がいたにしても、どうせ死人ばかりである。下人はそこで、腰にさげた聖柄ひじりづかの太刀たちが鞘走さやばしらないように気をつけながら、藁草履わらぞうりをはいた足を、その梯子の一番下の段へふみかけた。

それから、何分かの後である。羅生門の楼の上へ出る、幅の広い梯子の中段に、一人の男が、猫のように身をちぢめて、息を殺しながら、上の容子ようすをうかがつていた。楼の上からさす火の光が、かすかに、その男の右の頬をぬらしている。短い髭の中に、赤く膿うみを持った面皰にくびのある頬である。下人は、始めから、この上にいる者は、死人ばかりだと高を括くくつていた。それが、梯子を二、三段上つて見ると、上では誰か火をとぼして、しかもその火をそここ動かしているらしい。これは、その濁った、黄色い光が、隅々に蜘蛛くもの巣をかけた天井裏に、揺れながら映つたの

で、すぐにそれと知れたのである。この雨の夜に、この羅生門の上で、火をともしているからは、どうせただの者ではない。

下人は、守宮やもりのように足音をぬすんで、やっと急な梯子を、一番上の段まで這うようにして上りつめた。そうして体を出来るだけ、平たいらにしながら、頸のどを出来るだけ、前へ出して、恐る恐る、楼の内を覗のぞいて見た。

見ると、楼の内には、噂に聞いた通り、幾つかの死骸しがいが、無造作に棄ててあるが、火の光の及ぶ範囲が、思ったより狭いので、数は幾つともわからない。ただ、おぼろげながら、知れるのは、その中に裸の死骸と、着物を着た死骸とがあるという事である。勿論、中には女も男もまじっているらしい。そうして、その死骸は皆、それが、かつて、生きていた人間だという事実さえ疑われるほど、土を捏こねて造った人形のように、口を開あいたり手を延ばしたりして、ごろごろ床の上にくるがっている。しかも、肩とか胸とかの高くなっている部分に、ぼんやりした火の光をうけて、低くなっている部分の影を一層暗くしながら、永久に唾おとしの如く黙っていた。

下人げにんは、それらの死骸の腐爛ふらんした臭気に思わず、鼻を覆った。しかし、その手は、次の瞬間には、もう鼻を覆う事を忘れていた。ある強い感情が、ほとんどことごとくこの男の嗅覚を奪ってしまったからだ。

下人の眼は、その時、はじめてその死骸の中にうずくまっている人間を見た。  
檜皮色ひわだいろの着物を着た、背の低い、瘦やせた、白髪頭しらがたまの、猿のような老婆である。その老婆は、右の手に火をともした松の木片きぎれを持って、その死骸の一つの顔を覗きこむように眺めていた。髪の毛の長い所を見ると、多分女の死骸であろう。

下人は、六分の恐怖と四分の好奇心とに動かされて、暫時ざんじは呼吸きをするのさえ忘れていた。旧記の記者の語を借りれば、「頭身とうしんの毛も太る」ように感じたのである。すると老婆は、松の木片を、床板の間に挿して、それから、今まで眺めていた死骸の首に両手をかけると、丁度、猿の親が猿の子の尻しりみをとるように、その長い髪の毛を一本ずつ抜きはじめた。髪は手に従って抜けるらしい。

その髪の毛が、一本ずつ抜けるのに従って、下人の心からは、恐怖が少しずつ消えて行った。そうして、それと同時に、この老婆に対するはげしい憎悪が、少しずつ動いて来た。——いや、この老婆に対するといつては語弊ごへいがあるかも知れない。

むしろ、あらゆる悪に対する反感が、一分毎に強さを増して来たのである。この時、誰かがこの下人に、さつき門の下でこの男が考えていた、飢死うえじにをするか盗人ぬすびとになるかという問題を、改めて持ち出したら、恐らく下人は、何の未練もなく、飢死を選んだ事であろう。それほど、この男の悪を憎む心は、老婆の床に挿した松の



木片きざれのように、勢いよく燃え上り出していたのである。

下人には、勿論、何故老婆が死人の髪の毛を抜くかわからなかった。従って、合理的には、それを善悪のいずれに片づけてよいか知らなかった。しかし下人にとつては、この雨の夜に、この羅生門の上で、死人の髪の毛を抜くという事が、それだけで既に許すべからざる悪であった。勿論、下人は、さっきまで自分が、盗人になる氣でいた事なぞは、とうに忘れていたのである。

そこで、下人は、両足に力を入れて、いきなり、梯子から上へ飛び上がった。そうして聖柄ひじりづかの太刀に手をかけながら、大股に老婆の前へ歩みよつた。老婆が驚いたのは言うまでもない。

老婆は、一目下人を見ると、まるで弩いしゆみにでも弾はじかれたように、飛び上がった。

「おのれ、どこへ行く」

下人は、老婆が死骸につまずきながら、慌てふためいて逃げようとする行手を塞ふさいで、こう罵ののしった。老婆は、それでも下人をつきのけて行くこととする。下人はまた、それを行かすまいとして、押しもどす。二人は死骸の中で、しばらく、無言のまま、つかみ合った。しかし勝敗は、はじめからわかっている。下人はとうとう、老婆の腕をつかんで、無理にそこへねじ倒した。丁度、鶏にわとりの脚のような、骨と皮ば

かりの腕である。

「何をしていた。言え。言わぬと、これだぞよ」

下人は、老婆をつき放すと、いきなり、太刀の鞘さやを払って、白い鋼はがねの色をその眼の前へつきつけた。けれども、老婆は黙っている。両手をわなわなふるわせて、肩で息を切りながら、眼を、眼球めだまがまぶたの外へ出そうになるほど、見開いて、唾おしのように執拗しゅうねく黙っている。これを見ると、下人は始めて明白にこの老婆の生死が、全然、自分の意志に支配されているという事を意識した。そうしてこの意識は、今までけわしく燃えていた憎悪の心を、いつの間にか冷ましてしまった。後に残ったのは、ただ、ある仕事をして、それが円満に成就した時の、安らかな得意と満足とがあるばかりである。そこで、下人は、老婆を見下しながら、少し声を柔らげてこう言った。

「己おれは検非違使けいびいしの庁の役人などではない。今し方この門の下を通りかかった旅の者だ。だからお前に縄なわをかけて、どうしようというような事はない。ただ、今時分この門の上で、何をして居たのだから、それを己に話さえすればいいのだ」

すると、老婆は、見開いていた眼を、一層大きくして、じっとその下人の顔を見守った。まぶたの赤くなった、肉食鳥のような、鋭い眼で見たのである。それか

ら、皺しわで、ほとんど、鼻と一つになった唇を、何か物でも嚙しんでいるように動かし  
た。細い喉で、尖った喉仏のどぼとけの動いているのが見える。その時、その喉から、鴉からすの啼な  
くような声が、喘あえぎ喘あえぎ、下人の耳へ伝わって来た。

「この髪を抜いてな、この髪を抜いてな、鬘かすねにしようと思うたのじゃ」

下人は、老婆の答が存外、平凡なのに失望した。そうして失望すると同時に、ま  
た前の憎悪が、冷やかな侮蔑あべつと一緒に、心の中へはいって来た。すると、その気色  
が、先方へも通じたのであろう。老婆は、片手に、まだ死骸の頭から奪った長い抜  
け毛を持ったなり、墓ひきのつぶやくような声で、口ごもりながら、こんな事を言った。  
「成程な、死人しびとの髪かみの毛を抜くという事は、何ぼう悪い事かも知れぬ。じゃが、こ  
こにいる死人どもは、皆、そのくらいな事を、されてもいい人間ばかりだぞよ。

現在、わしが今、髪を抜いた女などはな、蛇しずんを四寸ばかりずつに切って干したの  
を、干魚ほしうおだと言うて、太刀帯たてわきの陣へ売りに往いんだわ。疫病えやみにかかって死ななんだ  
ら、今でも売りに往いんでいた事である。それもよ、この女の売る干魚は、味がよ  
いというて、太刀帯どもが、欠かさず菜料さいりょうに買かうていたそうな。わしは、この女  
のした事が悪いとは思おもうていぬ。せねば、飢死をするのじゃて、仕方がなくした  
事である。されば、今また、わしのしていた事も悪い事とは思おもわぬぞよ。これと

てもやはりせねば、飢死をするじゃて、仕方がなくする事じゃわいの。じゃて、その仕方がない事を、よく知っていたこの女は、大方わしのする事も大目に見てくれるであろ」

老婆は、大体こんな意味の事を言った。

下人は、太刀を鞘さやにおさめて、その太刀の柄つかを左の手でおさえながら、冷然として、この話を聞いていた。勿論、右の手では、赤く頬に膿うみを持った大きな面炮にきびを気にしながら、聞いているのである。しかし、これを聞いている中に、下人の心には、ある勇気が生まれて来た。それは、さっき門の下で、この男には欠けていた勇氣である。そうして、またさっきこの門の上へ上って、この老婆を捕えた時の勇氣とは、全然、反対な方向に動こうとする勇氣である。下人は、飢死をするか盗人になるかに、迷わなかったばかりではない。その時のこの男の心もちからいえば、飢死などという事は、ほとんど、考える事さえ出来ないほど、意識の外に追い出されていた。

「きつと、そうか」

老婆の話が終わると、下人は嘲あざけるような声で念を押した。そうして、一足前へ出ると、不意に右の手を面炮にきびから離して、老婆の襟上えりがみをつかみながら、噛みつくよう

にこう言った。

「では、己おれが引剥ひはぎをしようと思ひまいな。己もそうしなければ、飢死をする体なのだ」

下人は、すばやく、老婆の着物を剥ぎとった。それから、足にしがみつこうとする老婆を、手荒く死骸の上へ蹴倒した。梯子の口までは、わずかに五歩を数えるばかりである。下人は、剥ぎとった檜皮色ひわだいろの着物をわきにかかえて、またたく間に急な梯子を夜の底へかけ下りた。

しばらく、死んだように倒れていた老婆が、死骸の中から、その裸の体を起したのは、それから間もなくの事である。老婆はつぶやくような、うめくような声を立てながら、まだ燃えている火の光をたよりに、梯子の口まで、這って行った。そうして、そこから、短い白髪しらがを倒さかさまにして、門の下を覗きこんだ。外には、ただ、黒洞々たる夜があるばかりである。

下人の行方ゆくえは、誰も知らない。

(大正四年九月)



# 蛆 の 効 用

寺  
田  
寅  
彦









# 檸檬

梶井基次郎







# 山月記

中島  
敦









# 高瀬舟

森鷗外







歳棚に祭る神

柳田 國男









# 走れメロス

太宰治







# 舞姫

森  
鷗  
外









# 墮落論

坂口安吾







# 銀河鉄道の夜

宮沢賢治









坊っちゃん

夏目漱石







# 学問のすすめ

福沢諭吉









こころ

夏目漱石







# 人間失格

太宰治









# 遠野物語

柳田 國男





# 本書収録作品の出典について

本書に収録した以下の作品は、全てインターネットの電子図書館「青空文庫」(<https://www.aozora.gr.jp/>)の作成ファイルを使用しました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

なお、収録にあたっては、読解の便宜のため、原文の趣旨を損なわない範囲で、表記を改め、一部の表現をより平易に書き直しています。

## ■『こん狐』新見南吉

底本：「新美南吉童話集」岩波文庫、岩波書店

平成8年7月16日発行第1刷

平成9年7月15日発行第2刷

初出：「赤い鳥 復刊第三巻第一号」

昭和7年1月号

入力…林裕司

校正…浜野智

平成10年10月23日公開

平成24年5月8日修正

『よだかの星』宮沢賢治

底本…「新編 銀河鉄道の夜」新潮文庫、新潮社

平成元年6月15日第1刷発行

平成10年3月10日第4刷

底本の親本…「新修宮沢賢治全集 第八卷」筑摩書房

昭和54年5月

入力…佐々木美香

校正…野口英司

平成10年8月20日公開

令和7年2月2日修正

『羅生門』芥川龍之介

底本…「芥川龍之介全集1」ちくま文庫、筑摩書房

昭和61年9月24日第1刷発行

平成9年4月15日第14刷発行

底本の親本…「筑摩全集類聚 芥川龍之介全集第一卷」筑摩書房

昭和46年3月5日初版第1刷発行

初出…「帝国文学」

大正4年11月号

入力…平山誠、野口英司

校正…もりみつじゅんじ

平成9年10月29日公開

令和4年7月16日修正



## 髓 ― 資料編 ―

令和7年9月18日 第一版発行

著作者 ただの洋楽好き  
発行者 しがない塾講師

本書に収録した読み物（『ごん狐』『よだかの星』ほか）は全てパブリック・ドメイン（公共の財産）です。ただし、著者の執筆部分および本書の組版については、著作権法上の例外を除き、電子的または機械的な方法を問わず、無断で複製、転載、または情報の検索システムに保存することを禁じます。

Copyright © 2025 by Kunitiko Bessho. All Rights Reserved.